

愁眉を開く間もなく、悲運は何處までも悲運で、天この老藝術家に幸ひせず、或夜突然に劇場内から火を發して、劇場はもとより、人形、衣裳、諸道具に至るまで、すべて一塊の燒土と化せしめた。加賀掾の悲痛落膽、思ひ遣るだに哀れの極みである。さすがの老骨、もはや張りつめた我慢も挫け、無限の恨みを吞んで京都をさしてすごとくと引上げて行つた。

宇治はその後再び大阪へは下つて來なかつた。

## 苦節の十八年

### 缺損つゞきの興行

旗上げ興行の後一年、義太夫節に、はじめて新興淨瑠璃の意義が見へ出して來た。即ち貞享淨年二月、近松門左衛門は遂に義太夫の爲めに、特に義太夫の長所を發揮せしむべき恰好の作をもたらしたのである。それは『出世景清』と題するものであつた。そも義太夫が近松と相識る仲となつたのは、義太夫が會て京の宇治座に在るの時、お互ひに新しい藝術に志すものとして、或は將來を語り、提携の約を結んで置いたものであつたらう、義太夫第一回の旗上げに當然新作を上演す可き筈を、近松は大いに自重して、先づ舊作中の好評ものであつた『世繼會我』を與へて置き滿一年の後ち、始めて新作の『出世景清』を提供したのである。さうして今度も、その前途を祝福するの意味をこめて、ことに出世の二字を冠らせてゐる。ところが實はこの出世の二字は義太夫を祝福する意味の他に、實は門左衛門自身をも祝福せねばならぬ、進んだ内容をもつてゐるものなのである。此作の事件と云ひ、人物の性格などに、從來の行き方とは全然ちがつた扱ひを試みてゐる點に於て甚だしく義太夫の所謂新興淨瑠璃にふさはしく、密接になつて來てゐる。それはどういふことかといふと、在來は多く物語の形式であつたものが、此作でよほど、劇的な書き方に變化して、筋を生かさうとする努力、おぼろげながら、人物の性格なども描き出さうとしてゐる。本來井上流の剛健味を基調としてゐる。義太夫の藝風には、秋霜烈日の慨ある景清や、熱情貞烈の阿古屋は、もつともふさはしい、語り物で在來の景事節事に得意をもつてゐる以外、こゝに更に節を生かし天稟を現はす作品を得られたといふことは、一進境を示すものと云つて差支ない。かうして、新派淨瑠璃界に、いよく新しい曙光の見へ出して來たについて、さて此新傾向を示された當時の社會はどんな風だつたか。——殆んどこの傾向と相ついで、文壇や劇壇にも、異常なる更新が起つてゐて、大方の社會の風潮を物語つてゐるものゝやうである。

すべては古い殻を脱がうとしてゐた。人生的意義の上にやうやく一步を踏み出したのである。

芭蕉が貞徳壇林の俳調に甘んぜずして、古池や、の句に正風の價値を世に詢はんとしたのも、西鶴が好色本に筆を絶つて武家物商人物に移つて行つたのも、阪田藤十郎が、所作狂言の傳統を破つて、寫實の藝風を起して劇界を風靡したも、等しく此時であつた。

出世景清の新作上演に勢ひを得た義太夫は次で『佐々木大鑑』を語つてゐる。道行の文中、

思ひ川干きぬ袂に行く水の……………

胡弓や、さゝらを交せての相の山節が、珍重されて、『はしぐすみぐ』に此道行、稽古せぬもなく、これより義太夫節とて、もてはやしぬ』と操年代記は記してゐる。

なほ續いて近松の新舊作、或ひは作者不詳の狂言など、とり混ぜて上演し、元祿年間に入つてからの重なる語り物だけでも『天智天皇』『忠臣身替物語』『自然居士』『源氏十二段』『日本西王母』『松風村雨束帯鑑』『多田院開帳』『釋迦如來誕生會』『鎌田兵衛名所盃』『義經追善女舞』『頼朝伊豆日記』『百日會我』（團扇會我の改題）『當流小栗判官』『源氏烏帽子折』『浦嶋年代記』などを同十三年までに數へられる。

義太夫は此間、屢々一座を率いて旅の興行に出掛けた。安藝、備中などの中國地方を始め、美濃、尾張、伊勢、近江、紀伊、和泉、讃岐、ことに京都、奈良へは頻繁に足を運んでゐる。

かうして義太夫の技藝は次第に圓熟して、元祿十四年五月、遂に彼れの頭には榮冠が翳された。時しも東山天皇の御宇、勅許によつて、竹本筑後掾藤原傳教、と名乗ることになつた。義太夫、五十一歳。

竹本座では、すぐに披露興行の支度にとりかゝつた。作者近松門左衛門はこの祝儀興行の爲めに特に『蟬丸』を書いた。近松が何故に蟬丸を選んだかといふと、蟬丸は俗に音曲道の祖神として、古い傳説によつて祀られる神である、管絃の道に通じ、琵琶の名手であつたところから、平曲の家からはことにあがめられてゐる。その平家琵琶の流れであると稱されてゐる淨瑠璃道の爲めにも云はゞ祖神である。そこで近松はその以前の出世景清などと共に平家に縁のある此蟬丸を採つたわけであつて、その蟬丸の末段に『懐胎十月の由來』を添へたのも、胎兒十ヶ月の経過より、始めて人となるの由來を叙べて、暗に義太夫が、苦行の果て今日官名を受領するに至るまでの行程を物語り、さうして前途を祝福するの意を含めてゐる。

この蟬丸が、市中の評判を高めたことは無論のことで、蟬丸が逢坂山へ道行のくだりがことに喧傳されてゐる。

結ぶの神も偽りや、いつの月日に結びそめ、寝そめし夜半の夢消へて、縁さへ薄きから衣、御痛はしや蟬丸は、何のむくひか浮世の闇、御身に添ふるものまでば、玄上の琵琶一面、清實稀世御供にて、しほれ出でさせ給ひける。

筑後が得意の莊重な語りぶり、御痛はしや蟬丸が、と語つた調子が、誰れにも忘れられなかつたものと見へて、當時、こんな狂句が誰れからともなく流布されてゐる。

暗がり御痛はしやが行當り

筑後が官名受領の披露を、多くの最貴客の前でした、その舞臺の光景がどんなであつたかといふと、御下賜の裝束を三寶に載せて翠簾の前に飾り、自身は下座に見臺を控へておごそかな態度で勤めた。筑後の考へでは假令お下賜の裝束とは云へ、身に着けるは畏れ多しとて、態と三寶にて飾つたのである。

その後、筑後掾と名乗つてからは、ひき續いて『天鼓』『曾我五人兄弟』『大磯虎稚物語』『加古教信七墓廻』『最明寺殿百人上臈』などいふものを上演してゐて、元祿の末年に及んでゐる。さうして義太夫が最初からの願望であるところの、自分の創造に成る新派淨瑠璃の意義は次第に世間一般の人々に知れ渡り、その力の籠つた藝と云ひ、舊派の淨瑠璃には到底味はえない新味を湛へてゐるところ、或は何々、と優れた點は殆んど聴衆に肯かれるやうになつて來て、やうやく酬はれたやうであるが、その實はまだ義太夫の藝が根本から新しいところへ乗り出してゐたとは云はれない。而かも貞享二年竹本座の旗上げ以來、元祿十六年に至る十八ケ年間、義太夫の評判は追々高くなつてゐながら、竹本座の收支は償つてはゐない、多くは缺損を續けてゐる。何故にさういふ結果になるかといふと、一見甚だ矛盾したやうであるが、これは今も昔も變らない、藝術的に優れたものが必ずしも、興行價值を高めるものではないといふことである。それならば竹本座の興行の外に一般の見物を多く惹きつけてゐた興行物が、いつたいどういふ風になつてゐるかといふことをちよつと振返つて見る必要がある。

歌舞伎芝居の方では、阪田藤十郎を始めとして、水木辰之助芳澤あやめ、大和屋甚兵衛、荒木與二兵衛、山下半左衛門、竹嶋幸左衛門、柴崎林左衛門、などといふ名優が、京都と大阪とで始終興行をしてその妙技で見物を惹きつけてゐる。

古淨瑠璃の方も、すでに藝道の上では行きづまりになつて、墮落の傾向であつたが、それでも、まだ／＼隋力的に興行はつゞけてゐる。

て、文彌節で有名な岡本文彌、その外阿波大夫、説教座など、いふのが、興行をしてゐる。

さうして、此處にもつとも大衆向きとして、低級ではあるが、萬人を惹きつけることの出来る興行物がある。それは伊藤出羽掾のからくり芝居、山本飛彈掾の手妻人形、の類が素晴らしい人氣を集めてゐるのである。

歌舞伎や古淨瑠璃はともかく、竹本座にとつてはこれが唯一の大敵である、竹本座を永い間缺損に導いたも謂はゞ、かうした大敵があつたからである。それは無論技藝の上のことではなく、興行といふ上の問題で、いつも悩まされつゞけて來たのであつた。一般人の嗜好からいふと、靜かに味はひながら聽いてゐる淨瑠璃本位の竹本座もさることながら、手つとり早く見た目に變化があつて、單純な子供の頭でもすぐ解釋のつくやうな、からくり人形に早く足が向くのは止むを得ないことであつた。そんなわけで、竹本座を除く他の淨瑠璃一座は、早くも經濟

觀念を働かして、己が淨瑠璃

の間々へ、萬人の嗜好に向くからくりや手妻人形をとり入れて、一人でも多くの客を惹かうと焦慮つてゐるやうな状態である。

さつと竹本座の周圍がこんな具合ひだつたから、どうも\*



山本飛彈掾の手妻人形の形

興行成績が思はしくないのは當然で、氣の毒ながら、どうも義大夫の方は氣勢があがらない。たいていの者ならば、十八年も続いた不成績で、とくに尻尾を巻いて逃げ出してしまうところであるが、義大夫の氣持としてはそんなあやふやなものではない、いつかは萬人の前に己が技藝の深奥を訴へて、

どうでもかうでも、その心を惹きつけねば止まないといふ自信がある。この決心が腹の底に据はつてゐる以上、最早や彼れは微塵も周圍をふり返つて、心を悩ましてゐるやうな無駄はしない、唯一意専心、技藝の鍛練に心をひそめてゐた。ところが、どうも周圍の人達から見ると、氣の毒で見えてゐられない、あれほど苦心をして努力を拂つてゐながら、興行成績があがらないでは所詮は竹本座を續けて行くことが出来まい、どうせ時勢には勝たれないのだから、ひとつ義大夫に注告をしてやらうといふので、此際からくりを交ぜて遣つて見てはどうかと、恐る／＼彼れの機嫌をはかつて見たが、果して義大夫は頑として之れに應じなかつた。義大夫はかう云つてゐる

「御厚情は有難いが、私は私の創めた義太夫節なるものを唯一つの生命として、何處までも守り育て、行かねばならぬ、今日私の義太夫節がまだ一般の嗜好に投ぜぬといふことは、つまり私の藝がまだ未熟であるからだ。興行ごとの不成績も止むを得ないこと、思つてゐる。からくりや手妻人形を混用して、たとへ連日の満員をしたとてそれがなんで嬉しからう、私は如何なる苦行をしても、義太夫節によつて生きて行けばよいのである、たとへ見物が五人十人に減つても、たゞ一筋道に私の藝に精進するばかりである。

なんと驚くべき確信ではないか、これでは當座の注告を試みたくらいの方がぶつ飛ばされてしまふのもあたりまへだ。

ところが、こゝで、義太夫が如何に威張つても、彼れは資本家ではないかぎり、歛損つゞきで乞食になつてしまつてはなんにもならない、いくら意氣はゑらくとも物質はさうは行かない、これがどうなるかといふと、幸ひにも、竹本座旗上げ以來の盟主である竹屋庄兵衛が後ろにガツシリと控へてゐる。庄兵衛とても、もとより限りある資本だから歛損が嬉しい筈はないが、彼れは一旦かうと睨んだかぎり、斷じて義太夫を信頼してゐたのである。確固不拔な義太夫の決心と、必ずや將來大事業を爲し遂げる人物であるといふことは、一點疑ひを容れる餘地がない、かう見込んだ上は、彼れも又如何なる不入り不成績でもビクともするのではなかつた。とは云ふものの、義太夫とて庄兵衛とても人間だ、これが二年や三年のことではない、十八年の永い間、かういふ苦しみに出逢つて捩まぬ筈はない、無かし情けない思ひをしたであらうが、然かしとう／＼兜は脱がなかつた。達磨大師は面壁九年の黙想をつゞけ曾我兄弟は不俱戴天の仇を抱いて十八年、よくも辛抱をしたものだと思はれるが、義太夫の精進とて、それにも劣らぬ難行であつたことはいふまでもなからう。その頃の消息に通じてゐる西澤一鳳（近松淨瑠璃本の出版元で又豊竹座の作者）の著はした『今昔操年代記』はかういふ風に事實を物語つてゐる。

義太夫の語り盛り、日々夜々に音聲實り、節ごさばに花を咲かせば、聞く人見る人、この太夫ならではさ持てはやしぬ、なれども其頃は歌舞伎芝居當り多く、殊に出羽にはさま／＼のからくりなどし、見物諸方にわかれれば、さのみ大當りといふことなく、しぶらこぶらの見物、なれども耐へにこたへたり、……………

筑後掾の威勢夜まし日増しの繁榮、藝者のほまれ、四方に輝くさいへども、ほつこりさした藏入なく、三八の十八にて合はぬそるげん……………

かういふ風に悲境のドン底に陥ちて、もがき苦しんでゐる義太夫に、もう一つ難儀な出来ごとが起つて來た。まことに弱り目に祟り目、泣き面に蜂である。けれどもこれもどうすることも出来ぬ事實であつた。

一座の花形で古今無比の美音家、男性的な此竹本座の調和の上になくはならない竹本采女が、とう／＼退座をしたいと云つて出た興行上の成績がおもしろくなく、況んや自分の藝に強い自信が出来てゐる采女は、もう一日も辛抱がしてゐられない、今この時とばかり断然決意を示した。義太夫とて是れを聞いて多少は苦い顔をしたであらうが、強いてこれを引き止める勇氣はない。義太夫とてその昔、宇治加賀の一座にあつて、京の見物に非常な人氣を博してゐながら、自己の信念の上から断然退座をしたことがある、そればかりでなく加賀掾との對抗興行もつい此間のことだ、さう得手勝手は云はれないわけである。義太夫は采女に退座を許してやつた。許してやつたのはいゝが、これが爲めに竹本座は一層の悲境である、内憂外患交々至るで、如何なる鐵石心もかう傷めつけられてはたまらな  
5。

さて窮境のドン底にある竹本座を見捨て、出て行つてしまつた采女はどうなるかといふとこれが果して同じ道頓堀の東立慶町の芝居で、道具屋吉左衛門、永嶋重太夫、などといふ連中と一座して、素淨瑠璃を始めたが、もとより永續きはしないで、すぐ中止してしまひ、その後もう一度準備を豊富にして、陣容を立て直して、自身も豊竹若太夫といふ名に改めて、櫓幕にも堂々と豊竹座と記して打つて出た。いふまでもなく天稟の美聲を以て竹本座の豪音義太夫に對抗挑戦する爲めである。この豊竹座とは今の辨天座のあたりである。道頓堀の東西には、かうして二つの『操り芝居』の櫓が對立することになつたのである。

若太夫は後に越前少掾を授けられた。大阪南船場の富豪の子、霸氣に富んだ敏慧の人。

義太夫は、天王寺村の百姓の子、純情眞摯の人、おもしろい對象ではないか。

## 曾根崎心中上演

### 新しい現代語の試み

義太夫の方も、かういつまで傷めつけられ、叩きのめされてゐては、實際どうにもかうにもならない、ところが天の助けといはうか加佛の護か、困りきつた義太夫の頭の上へ一道の光明がサツと耀いた。弘誓の船はその岸まで漕ぎつけられたのである。義太夫の喜び譬ふるものがない。救ひの神様とはいつたい誰れだ、近松門左衛門その人である。